

王貞治を甦らせた名脇役

校 長 武井 正明

私が初めて張本勲を見たのは、1976年8月12日後樂園球場の巨人阪神戦。

私は当日3時間並んで座った阪神側の外野自由席、ジャンボスタンドから観戦した。

その時最も近くで見た巨人選手がレフトを守っていた張本の背中だった。その時の印象は強くない。当時は堀内恒夫しか興味がなかった。

私が知っている張本は、日本ハムから巨人に移籍してきた頃からのもの。

当時四番を打っていた王さんは、子供心ながら長嶋さんには相当気を遣っているように見えた。「ON 砲」とは言いながら「世界の王」はいつも控えめで、長嶋茂雄の前に立つようなことは絶対なかった。それは王さんが、台湾から日本に来て苦労してきたお父様からの「謙虚に生きなさい」という訓えを、そのまま受け継いできた生き方のように見えた。

長嶋が引退し、新監督となった1975年巨人軍は球団創設初の最下位という屈辱を味わった。その大きな要因は、長嶋茂雄という大きな支柱を失った王貞治の大不振であった。長嶋は自分自身の穴の大きさを、監督になって思い知るのである。

そこで巨人軍はペナント奪回の大改革として、レフトの高田繁を猛特訓し、長嶋の後釜としてサードにコンバートした。そして長嶋に代わる王のコンビとして、高橋一三と富田勝を放出してまで、既に日本ハムの主砲であった張本勲を獲得したのである。

新たな相棒を得た王は、見事な復活を遂げた。

張本は王貞治を心から崇拝し、王の引き立て役を買って出ているようだった。張本勲も日本人ではない（後に日本国籍を取得）。幼少時から理不尽な人種差別と闘いながら、体一つで母国の誇りを失わず、日本で成功を収めてきた。その苦労がどれほど大変なものを理解する仲間として、日本のプロ野球界で共に活躍する同志として、王さんを敬愛してやまなかったのだろう。

だからこの時、ずっと主役の座を長嶋茂雄に遠慮してきた王貞治は、張本勲という名脇役のおかげで、巨人軍の真の中心に座った実感を、やっと得ることができたのではないか。

私が大好きな写真がある。

王貞治が世界新記録の756号を放った際に、穏やかな笑顔で万歳をする王の後ろで、ひと際大きくジャンプして、我が事のように満面の笑顔で喜ぶ張本勲の姿だ。

いいなあ…この1枚からふたりの熱い友情が伝わってくる。ハリさんと一緒にOH砲を組んだ王さんは、きっと幸せだったろうなあ…。

だから訃報を聞いて、最も淋しいのは王さんなのかもしれない。

去年長嶋さんが天国に行って、今年はハリさんか…。今頃大沢親分と会ってるかな。

どんどん昭和が遠くなる。私もだんだん寂しくなってきた。 (敬称略)